

令和元年6月19日現在

機関番号：32507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26380901

研究課題名(和文) 幼児向け説明方略の熟達過程と身振りの変化 - 保育実習生の縦断研究 -

研究課題名(英文) How do strategies and gestures change when providing explanations to young children? A longitudinal study of trainee nursery teachers

研究代表者

大神 優子 (Ohgami, Yuko)

和洋女子大学・人文学部・准教授

研究者番号：40452031

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：幼稚園の先生・保育士を目指す学生が、養成課程の4年間を通じて、どのように幼児への説明方略及びその前提となる知識を変化させていくかを横断的・縦断的に検討した。説明方略や留意点、説明の前提となる保育環境に関する知識、実際の説明場面の説明内容や身振りについて検討した。その結果、これらの変化には、実習の経験の有無だけでなく、実習の段階(見学実習・責任実習)が影響していることが示された。これらの結果をもとに、各実習段階における学生自身の目標や、養成課程における評価の観点について提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、複数回の実習を行う保育者養成課程特有のカリキュラムを生かし、横断的・縦断的に検討を行った。中でも、4年間の振り返りによる学生自身による報告と、縦断的な面接実験による実際の行動の客観的な評価の両方で検討した点に特長がある。

異なる手法でも共通して示された実習段階の違いによる影響は、保育者養成課程の学生に対する評価及び学生自身の目標設定に資するものである。保育士不足・離職率の高さ等からより質の高い保育者養成が求められている現在、現職教育ではない視点の研究である。

研究成果の概要(英文)：A cross-sectional and longitudinal study was carried out on how the explanation skills of students aiming to become nursery teachers improve. Students underwent five on-site training sessions at locations such as kindergartens during their four-year curriculum. Changes in their explanation skills and knowledge before and after on-site training were investigated. The results show that improvements in explanatory strategies and knowledge about childcare were influenced by not only whether or not the students experienced on-site training, but also by the content of the training, that is, the kind of training they have experienced. Based on these results, we suggest goals appropriate for the different stages of on-site training.

研究分野：発達心理学、教育心理学

キーワード：保育者養成 実習生 縦断研究 子どもへの説明 身振り

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

幼稚園の先生や保育士(以下、保育者)を目指す学生は、養成課程の2～4年間で複数回の実習(下図)を行い、幼児とのコミュニケーション技能を体系的に熟達化させていく。しかし、従来の保育者を目指す学生の変化を調べた研究の多くは、ピアノ曲や手遊びのレパートリー数、絵本の読み聞かせ等の保育技術の習得過程を中心としていた。また、単独の実習の前後の変化や、養成課程全体を通じての変化、あるいはベテラン保育者との比較が多く、実習の各段階でどのような変化が生じているかの検証が不十分であった。

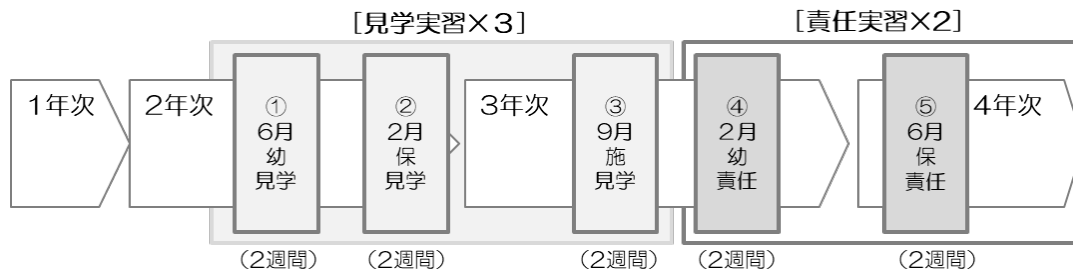


図 保育者養成課程(4年制)における実習の例  
は幼稚園教諭、 は保育士のカリキュラムの実習

### 2. 研究の目的

本研究は、保育者養成課程の学生が、1年次から4年次までの座学及び複数回の実習を経て、聞き手(幼児)への配慮や説明方略をどのように変化させていくかを、主に以下の3点から明らかにする。

- (1)説明方略・留意点
- (2)説明の前提となる保育環境に関する知識
- (3)実際の説明場面の説明内容や身振り

実習段階ごとの横断的・縦断的検討によって、これらの変化の詳細を把握し、学生自身の目標設定や振り返り、養成課程における評価の指標の基礎的資料を得ることを目的とした。

### 3. 研究の方法

#### (1)対象

保育者養成課程に在籍する女子大学生を主な対象とした。1年次～4年次の4年間を追跡した縦断グループの他、横断的な比較対象として、保育者や入学年度が異なる他学年グループ、実習を行わない他専攻学生も対象とした。

#### (2)手続き

##### 説明方略・留意点

学生や保育者に対するアンケートで、特定の説明場面(避難訓練時の説明や工作などの説明場面)で子どもと接する場合に、どのように説明を行うかやその際の留意点を尋ねた。また、最終学年の振り返りでは、自覚できる範囲での変化や、それらの配慮が変化したタイミング及びその変化に影響を与えた実習についても尋ねた。

##### 説明の前提となる保育環境に関する知識

実習段階ごとの保育環境に関する知識を調べるため、保育室や園庭にあるものを列挙(筆記)する集団実験を行い、単語数や内容を検討した。

##### 説明場面の説明内容や身振り

実習段階ごとに、個別に面接実験を行った。幼児に示すつもりではさみで紙を切るふりをする等の文脈なしの場面、○歳児クラス○月の活動で、クラスの幼児が○○を作る際はさみの使い方について説明する等の文脈ありの場面の2種類の状況について、実際に幼児が目の前にいるつもりで実演させた。説明時の様子はビデオカメラで記録し、この映像を元に分析を行った。また、あわせて発話傾向などの個人特性についてもアンケートを行った。

## 4. 研究成果

### (1) 説明方略・留意点

具体場面や場面を特定しない留意点について、横断的・縦断的に検討した。その結果、保育者と比較すると、保育学生は子どもの理解を踏まえた説明に不備が見られるものの、4年間の中では、より視覚教材や説明の段取りの工夫を行えるようになっていく過程が示された。4年間の振り返りで自覚できる範囲では、責任実習の影響が大きく、1回目の責任実習では、あらかじめ準備できる教材の工夫の他、手順等を説明する際の声の大きさや作業の進め方・区切り方など、事前準備や想定が可能な部分での工夫ができるようになることが示された。さらに、2回目の責任実習で、子どもの個々に合わせた言葉かけでの工夫が多く自覚されるようになっていた(下図)。

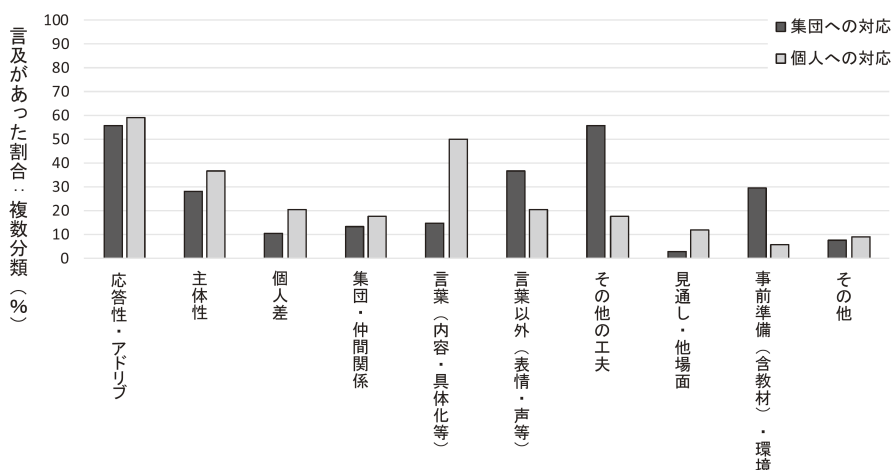


図3 記述内容における各カテゴリへの言及割合

大神(2019), p.19 より

### (2) 説明の前提となる保育環境に関する知識

列挙された単語について、横断的・縦断的に検討した。その結果、実習経験の有無や実習の段階による知識の違いが、想起される単語数や内容の違いに反映されていた。対象学生は、見学実習を経験することで、座学だけの段階よりもより詳細に保育環境内のものをあげることができるようになっていた。さらに責任実習後は、生活用品や水道等の設備への言及が増え、幼児の動きや生活を含めて考えられるようになってきていることが示唆された(下図)。

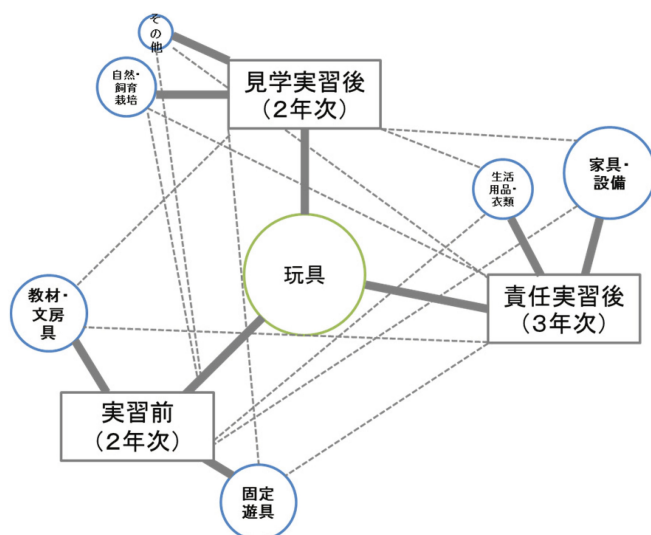


図6 保育環境課題(保育室・園庭)における各カテゴリと時点の共起ネットワーク  
※樋口(2014)によるKHCoderを用いて描出した図をもとに筆者作成

大神(2017), p.83 より

### (3) 実際の説明場面の説明内容や身振り

実際の説明場面(幼児がいることを想定した模擬説明)では、(1)の留意点と一致する工夫がみられたが、多くは幼児の反応に左右されるものであるため、実験上の統制のために幼児を想定する手続きでは限界があった。身振りについては1年次時点から多くの学生が用いていたが、上級学年では、これらの角度や内容を工夫するようになる等の変化が見られた(発表準備中)。

以上をふまえると、見学実習段階では説明の前提となる環境や視覚教材等について習得し、責任実習段階では、それらを実際の保育の文脈の中で活用し、さらに、個々の子どもへの対応を身につけるといった流れが想定される。実習の事前事後指導では、学生自身がこれらの段階を意識できるような目標設定が有効であると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

大神優子 2019 保育実習生の子どもとの関わり - 集団及び個人への対応の変化 - 和洋女子大学紀要,60,13-22. 査読あり

DOI: info:doi/10.18909/00001908

大神優子 2018 保育学生の実習における省察-保育者省察尺度を用いた2年生と4年生の横断的検討 - 和洋女子大学教職教育支援センター年報,3,pp.61-68. 査読なし、DOIなし

大神優子 2018 対人葛藤場面における「子どもの姿」の読み取り-保育学生に対する映像/文章提示の比較- 和洋女子大学紀要,58,61-70. 査読あり

DOI: info:doi/10.18909/00001559

大神優子 2017 保育環境知識に関する語想起課題の検討(3) - 実習段階の比較 - 和洋女子大学紀要,57,75-85. 査読あり

DOI: info:doi/10.18909/00001408

大神優子 2016 保育環境知識に関する語想起課題の検討(2) - 実習前後の比較 - 和洋女子大学紀要,56,67-74. 査読あり

DOI: info:doi/10.18909/00001381

大神優子 2015 保育環境知識に関する語想起課題の検討 - 実習経験の有無による比較 - 和洋女子大学紀要,55,99-107. 査読あり、DOIなし

〔学会発表〕(計 7 件)

大神優子 2016 保育実習生の熟達化過程測定の予備的検討(3) - 実習段階による保育環境知識の比較 - 日本教育心理学会第58回大会発表論文集 於サンポートホール高松・かわわ国際会議場

Yuko Ohgami 2016 Verbal Fluency Tasks Related to the Knowledge of Childcare Environments: The Role of Practical Experience. The 31st International Congress of Psychology, July 24-29, Pacifico Yokohama, Yokohama, Japan. PS26P-06-164

大神優子 2015 保育実習生の熟達化過程測定の予備的検討(2) - 実習前後の保育環境知識の比較 - 日本教育心理学会第57回大会発表論文集 p.522 於朱鷺メッセ

大神優子 2015 保育(実習)経験による説明時の留意点の違い 日本保育学会第68回大会発表要旨集 21086 於椋山女学園大学(名古屋)

大神優子 2014 保育実習生の熟達化過程測定の予備的検討 - 実習経験の有無による保育環境知識の比較 - 日本教育心理学会第56回大会発表論文集 p.823 於神戸国際会議場

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

(なし)

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

(なし)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。